ゴンドラ
Gondola

生きること、それはもう一度愛すること
To Love again is to Live Again

話題性に頼ることなく、映画でしか成し得ない本当の独創性にこだわって、当時20代の若者たちの参加によって独立プロで製作し、1988年に劇場公開された劇映画『ゴンドラ』。

完成から30年を経て今、美しい映像と幻想的な色彩に透明なメッセージを封印して、ひとりの少女の“心の対話の物語”を刻みこんだこの作品の**リバイバル上映が決定！**

古いけれど新しい･･･大事な忘れ物を思い出させてくれるこの映画を、ますます先が見えにくくなったこの現代に彷徨い、浮遊する、たくさんの“孤立する魂”に、今、あらためて届けたい。

gondola-movie.com

作品に関するお問合わせは Teamゴンドラ gondola.movie@gmail.com

死んじゃうと、生きてたことってどこいっちゃうのかな —— 追い詰められ、張り裂けそうな喪失感･･･
都会、母子家庭、いじめ、孤立･･･笑うことのない瞳を持った少女“かがり”は、窓拭きの青年と出遭った

Story

高層ビル街の上空。ゴンドラに乗って窓を拭く青年･良。窓ガラスの向こう側は彼にとって音のない別世界。眼下にはミニチュアールな都会の光景 ―ノイズが波の音に聴こえ、彼の目には幻の海が重なる―。

11歳のかがりは、母･れい子とふたりでマンション暮らし。

母は音楽家の夫と離婚し、夜の仕事で忙しい。いつも個食のかがりの孤独を癒やす遊び相手は、二羽の白い文鳥しかいない。

父の幻影と”記憶の痛み”が時折彼女を襲う。―Aの音―音叉の響きに耳を澄ますことで、かがりは自分の心を落ち着かせ、調律した。

ある日、鳥かごの文鳥が激しく争い、一羽が傷つく。瀕死のチーコを両掌に抱きとり、茫然自失として立ち尽すかがりを、窓の外を降りてきた窓掃除の良が目撃する･･･そして･･･

Review ＜公開当時にいただいたもの（敬称略）＞

石井聰亙（岳龍）（映画監督）

薄っぺらな愛と感動に占領された日本映画の銀幕（スクリーン）上の「乾ききった夢（ドライ･ドリーム）」を潤すに十分な、ナイーヴで水々しい感性にあふれた劇映画である。その美しきナイーヴさの底に秘められた「浮遊する魂」の叫びは、満たされない感動（カタルシス）の呼吸困難に喘ぐ、ガラスケースの中の観客たちの心の奥の大切な部分に、ある共振をひき起こすに違いない。

大林宣彦（映画監督）

まるで十歳の少女、そのもののような映画だ。ぶっきらぼうで、かたくなで、挑戦的で。だから限りなく優しくて、いたわり深くて。真の底からリアリストであるがゆえに、とめどなくロマンチシズムを紡ぐ。十歳の少女は、それ自体、奇蹟だ。その少女の目から、人間を見た。その時、例えば、海は固有の物語となった。そこにこの作者のこだわりがある。ギクシャクしたそのこだわりが、ひとつの生命力を持ち、音楽となり、言葉となった。その言葉に耳を傾け、その心の響きに耳を澄ます悦びが、この映画にはある。

美しい映画だと、ぼくは思う。

佐藤忠男（映画評論家）

「ゴンドラ」は、美しい情感を持った映画である。やさしく、心がこもっており、ていねいな仕上がりだ。映画づくりが総じてますます乱暴な方向に向かってゆく傾向の中にあって、これは貴重なことだと思う。

森崎 東（映画監督）

「ゴンドラ」は迸る作品だ。
水彩画の筆の動きに、微かな、幼児の記憶のように幽かな音を入れる、という感性の迸りに、日本映画、いや全映画の中で、かつてなかったこの大胆で繊細きわまる感性の迸りに、そしてラストシーンの夥しい灯のゆらめきの迸るような美しさに感動しない人はいない筈だ。

失われた命の旋律を索めて、ふたりが向かったのは —— 暖かい北 ——

映画「ゴンドラ」小山市上映会&参加申込書（公益財団法人 楽天　未来のつばさの助成事業）

日時：2017年 3月20日(祝)　上映 13:00~15:00　トークセッション 15:00~1600（開場30分前）

会場：栃木県小山市 小山市生涯学習センター（ロブレ6階）＜小山市中央町3丁目7番1号＞　参加費無料

上映後、「ゴンドラ」のプロデューサー 貞末麻哉子さん、青少年自立援助ホームの星俊彦さん、いじめ・不登校の経験者とのトークセッションがあります

主催：認定特定非営利活動法人サバイバルネット・ライフ　お申込み　電話&FAX：0285-24-5192
お申込み締切日　2017年 3月16日(木)

参加ご希望の方は、以下にご記入の上、0285-24-5192 サバイバルネット・ライフまでFAXでお申込みください

お名前　　様	電話	お申込みの人数　　名様
ご住所 〒		